

地域活性の世界大会、スウェーデンで開催

# イノベーションは地域に偏在

6月15日~17日の3日間、スウェーデン南西部のトルヘッタン市のユニバーシティ・ウェスト会場に、第20回ウッデバラ・シンポジウム(Uddevalla Symposium)が開催された。近年は、地域活性分野の世界大会として認知されつつある。



現在は、インキュベーション施設などに生まれ変わっているサーブ本社工場跡地

## かつては自動車・航空機で繁栄

快晴のさわやかな日差しと澄んだ空気が心地よい北欧の人口4万人の田園都市、トルヘッタンに世界20カ国から100名の研究者や実務家が集まった。

節目となる今回の第20回大会は、国際化された地域経済におけるイノベーション、アントレプレナーシップ、産業のダイナミクスなどをテーマに活発な議論が行われた。

これまでも、イギリス、ドイツ、イタリア、デンマーク、アメリカ、日本など世界各国の持ち回りで開催されてきたが、記念大会ということもあり、

本部の置かれているスウェーデンでの開催となった。

トルヘッタン市は産業革命以降、自動車産業や航空機産業で発展し、かつては湖からの豊かな水を利用した水力発電から産業が発達し、蒸気機関車の製造も行われていた。

自動車メーカー、サーブの本社工場があったことでも知られる。サーブは残念ながら2011年に事実上経営破たんし、現在は中国企業の所有で工場も中国に移転。今年中にサーブのブランドも消滅の予定だ。かつての工場一帯は、レンガ造りの旧工場の建物を生かして、産業支援センターやインキュ

ベーション施設に生まれ変わっている。

ユニバーシティ・ウェストは、地域の産業構造の劇的な変化に対応するための役割も期待されているのだ。

## 多様な参加者、多彩な発表

世界大会は、地元・トルヘッタン市のエイカールンド市長からの歓迎挨拶で幕を開けた。

基調講演は、3日間にわたり各日の午前中に毎日3~4名ずつ、計11名が登壇した。グローバルと地域の関係について様々な視点からの講演があった。

多国籍企業と地域経済の再編、国際的な研究開発活動、再生医療、IT、



スウェーデン南西部のトルヘッタン市のユニバーシティ・ウェスト(University West)が会場



大会には、世界20カ国から100名の研究者や実務家が集まった



地元・トルヘッタン市のエイカールンド市長からの歓迎挨拶

産業クラスターなど多岐にわたった。なかでも、最終日には、英国サセックス大学のストレイ教授が、イングランドとウェールズの起業家支援政策と、その効果について過去90年間にわたってデータを分析した結果、行政の政策の大きな効果は見られなかった、との研究報告を行い、議論を呼んだ。

各日の午後は5~7会場にわかれて、セッション(分科会)が開催された。セッションごとにテーマが設定され、各セッション5名がテーマに沿った発表をしてディスカッションを行った。セッションによっては、著名な研究者に交じって、大学院生が意欲的なテーマの研究発表に果敢に挑戦している姿が見られた。

## イノベーションの「地域偏在性」

日本からは5名が参加し、セッションの1つを担当した。座長を務めた早稲田大学ビジネススクール・吉川智教元教授は、次のように世界大会を振り返る。



風光明媚なトルヘッタン市

「ウッデバラ・シンポジウムは、特定地域の経済発展をテーマとしており、極めてユニークな国際学会の世界大会です。日本からは昨年のロンドン大会に引き続き、愛知学院大学の鶴飼宏成教授と2人でセッション(分科会)を提案しました。

今回提案したテーマは、『イノベーションの地域偏在性と新産業創出』というもの。幸い、大会組織委員会にその意義が認められ、セッション開催の運びとなりました。地域活性学会のニュースレターでも参加をよびかけて、鶴飼宏成氏(愛知学院大学教授)、今瀬政司氏(京都経済短期大学准教授)、奥山睦氏(慶応義塾大学大学院博士課程)、白石史郎氏(事業構想大学院大学事務局長)が発表しました。

2日目の13時に始まり、全体の総括の時間を含めて17時半まで4時間半の長丁場でした。われわれのテーマは、イノベーションは、世界の特定の地域でしか起きていないという現象に注目したものです。もしも、イノベーションが起きている地域の条件が解明されれば、特定の地域の活性化の条件を明確にすることができるはずです」

## アウェイを楽しむ

「発表は全て英語ですから、皆さん大変な思いをしての発表です。発表後のコーヒープレイクや会食時の海外からの参加者の質問、コメント、議論に巻き込まれ、研究者として、自分の研

究の普遍性を実感した人が多かったのではないのでしょうか。

海外で英語での研究発表は、スポーツで言えばAwayでの試合と同じです。一度、自分の研究が海外の学者から注目されることに味をしめると、発表前の緊張感と発表後の開放感は癖になります。

国際学会というとハードルが高いように思われるかもしれませんが、事前に資料も十分時間をかけて準備できますし、発表後にフルペーパーにまとめれば、立派な論文集に掲載されるチャンスもあります。ぜひチャレンジしてみてください」(吉川元教授)

共同で座長を務めた愛知学院大学の鶴飼宏成教授は、「連日多くの方と交流する機会に恵まれました。フィンランド、スウェーデン、ドイツなどいろいろな国の方と交流しました。このような方々が普通にいて、共通する問題意識で話し合えるこのシンポジウムがどれほど貴重なものか、改めて喜びを噛み締めています」と振り返る。

今回の日本から参加した発表者のセッションは、9月1日~3日に開催される地域活性学会第9回研究大会(島根県立大学・浜田キャンパス)のなかでも日本語で開催する。

来年の世界大会の開催地はヘルシンキの見込み。地域活性学会では「国際学会チャレンジ部会(仮称)」を立ち上げ、会員の国際学会デビューを支援する予定という。 **1**